

# 風土

4



白椿

神蔵

器

煤竹を茶杓に削り山笑ふ

百八段此教難持坂冴返る

日蓮の往生柱山菜萁咲く

まんさくや水琴窟に音生まれ

掃苔や火のしたたりに牡丹の芽

ハンカチを指に巻く癖春の雁  
建国日海鼠に泪そそがるる  
止め石の結び十字や春の雨  
透析の時彦おもふ余寒かな  
ト伴や波郷椿は遅れをり  
鳥寄せのみかんどーナツ良寛忌  
はるかなる蛇笏の句あり白椿

# 竹間集

同人作品



波の花 浜 明史

朽ちかける蚕の苦屋ぞ波の花  
蚕が屋の簷のほつれや海鼠干す  
息白し紙工房の二夫婦  
大江山連峰に雪紙を干す  
門川に晒す楮や娶り唄  
寒に入る丹波や酒の仕込唄  
気配して春暁の浜うごき初む

猫の恋 浜 福恵

ひゆるひゆると夜を突くごとし鯿の海  
魚裂きて節分の水濁しけり  
梅林を分け入り湖へ出でにけり  
縄文の湖へ棹さす梅見かな  
海苔を干す水平線のまるさかな  
釣人のうしろを通り猫の恋  
しほまねき父の忌の海風ぎわたる

寒 昴 蓮尾あきら

海に出て海の音きく寒昴  
冬耕の鋤は波音背負ひをり  
舟宿を一つ出てゆく寒の明け  
人の目にかかはりはなし鳩潜る  
寒木瓜や人を待ちある陶の椅子  
牛の子のまなこいきいき竜の玉  
山眠る月のひかりの中にゐて

七 草

鈴木とおる

孫の手を借りて荒神様を縋ふ  
買うて来し七草籠の軽さかな  
松過ぎの齒医者の椅子に深く掛け  
那須よりの風花走る日和かな  
緋寒桜海のあをさを引き寄する  
あをあをと大室の天冬桜  
着ぶくれて膝に『西行花伝』かな

まんさく

外川 玲子

地藏山北風のめりはりのこしけり  
雪灯籠灯せばゆるる闇一つ  
一村に一軒の宿路の臺  
寒の内の海赤き煙突林立す  
まんさくのほころびそめし風の中  
春しぐれ連れ深川のあさりめし  
犬小舎の塗り替へられて暖かし

春 愁

村上田鶴子

立春大吉今朝の散歩は神社まで  
筆塚は風のかよひ路石路咲いて  
うららかや目礼だけの顔見知り  
テールの今日の一句はさくら草  
あたたかしスクールバスの児をひろひ  
春愁や子のセーターを夫の着て  
紫を好みて老いぬヒヤシンス

春の足音

山田 暢子

波音の中のふるさと針供養  
臘梅に透ける青空子ら遠し  
雑木林靄ひて春の足音す  
撒かれたる餌に白鳥ら押し合へる  
白鳥のこゑや河原に縄張られ  
白鳥に永き黄昏ありにけり  
白鳥も夢見る頃かペンを描く

手繰れるものに「病日記」

— 小野寺節子 —

麻酔地獄さめて極楽星涼し  
点滴の血管逃げる夕薄暑  
命つぐ青葉若葉の星の下  
点滴の一滴二滴薔薇匂ふ  
白粥に梅ぼし母郷遠くして  
緑雨あぶ雀の声のきこえきぬ  
眉つくるうしろに百合の匂ひぬる  
明易といふも一羽の雀かな  
日日草病者一と日の計立てり  
夏の蝶見舞のやうな羽使ひ

脈をとるナースの素顔涼しかり  
星空に降る病葉のうらおもて  
ベッド起つ朝暁雀の声にかな  
考へる時間全し百合香立つ  
病院に出張美容師髪洗ふ  
人恋ふる昨日に今日の百合の花  
薔薇を剪る女医の手にある花鋏  
たましひを野放しにして五月病む  
紫陽花や病みて覚えし介護法  
つくづくと病みて今更薔薇愛す

# 山河集

同人作品



神蔵 器選

餅花の牛舎に揺るる飛驒郡 代田 青鳥

臘梅や棒差すだけの木戸の鍵  
寒柝の道順少し変へてをり

白梅や御成街道一里塚  
トロントへ送る越後の鏡餅

初糶の鮫鰯を提げ戻りけり 遠藤道遙子

紀州初糶

蜜柑船出でし港の大夕日  
文人の墓多き丘笹子鳴く  
庭師来て二言三言暮れ早し  
ケルネルの田圃のほとり冬桜

竹爆でて水のふき出すどんどこかな  
七度目の干支を迎へて初日浴ぶ 井上 あい

積木のごと大黒埠頭の初荷かな  
振袖の風の匂へる成人祭  
口上のがまの油や日脚伸び

大野 英美

碾茶篩ふ香のなかにをり笹子鳴く  
明日ありて葛湯に生姜したたらす  
六日年越みぎれいに櫛立つ  
姫沙羅の幹緒々と寒に入る  
空青きままの夕暮蕪村の忌

柿沼 盟子

佗助やホテルの中の石畳  
ぜんまいを巻く目覚ましや大晦日  
左義長や弁天堂へ石の橋  
冬の家暮れて尖りぬホテル群  
針月の匂ひこぼせり水仙花

◇特別作品◇

榛の花

大野 英美

宿り木や伊和といふ名の一の宮  
冬ざくら他界のいろと遠ながむ  
室の津や霰じめりに遊女の碑  
晩年を小出しに冬の花わらび  
陶窯の煙ひとすぢ年詰る  
人麻呂のかぎろひに逢ふ初日かな  
閉づるなき魚の眼や夜木枯  
一月十七日神戸には寄らざりし

---

青き声上げて海峡春を呼ぶ  
寒明けや黄鐘の韻はるかより  
春北風瘦身空也眉太き  
むかし踏鞴場まんさくのまたたきぬ  
法然の舟説法や寺日永  
汐汲み女祀りて須磨や東風まぶし  
城垣の石の百相風光る  
無縁墓浄めて春のひと時雨  
日ざしすぐ風に流され榛の花  
干し殺しありたる城や梅真白  
雉子の声ふたりに聞こえ朝のパン  
利休忌のよぢれくづれつ鳥柱

---

# 風土独語／神蔵 器



凍蝶にあと一寸の朝日かな

近藤幸三郎

一寸は約三・〇センチ。距離、寸法、時間などのわずかなことのたとえにも使われる。この句も朝日が凍蝶にとどく距離をいつているわけであるが、あと一寸と把握したのは、単に短い距離を示すという以上にゆゆしい大事が暗示されている。

凍蝶は荒れはてた大地、枯れきつた冬の庭などにじつと凍りついたように身動き一つしない、美しく哀れにもろい。もし指先でも触れたら、ぱらりと翅も崩れ落ちてしまうかもしれない。しかしそんな凍蝶でも、あと一寸、ほんの暫くして朝日がとどけば、凍る呪縛から解放され、再び生氣を取り戻すことができるであろう。だが、凍蝶が氷の呪縛から解放される瞬間は、凍蝶に残された命の最後の熱を奪われる瞬間でもある。凍蝶にとつて生死を分かたつぎりぎりの時がこの一寸である。

凍蝶の己が魂追うて飛ぶ

虚子

雪吊のてつぺんに載る天守閣

代田 青鳥

「この天守閣は鶴ヶ城でしょうか」

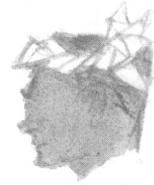
「ハイ、そうです」

電話での一問一答である。東北にお城は沢山あるが、天守閣となると弘前城と鶴ヶ城がすぐ浮かんでくる。弘前城は江戸後期のもので、明治維新の折もいち早く新政府軍に加わったので取り壊しをまぬがれ、現在までほぼ旧状を保っている東北では唯一の天守閣である。桜の名所として知られるが、松も多く、特に冬は雪を被った老松のみどりかひときわ冴え冴えと澄みわたった空気のなかに鮮やかさを増す。しかし大木になったためか、雪折れの枝はいくつかあったが、雪吊は見られなかった。

一方、鶴ヶ城（会津若松城）は、明治元年戊辰戦争の際、一ヶ月の籠城の果に開城し落城した。翌明治二年、若松県が誕生し城跡は県庁となり、同六年新庁舎が完成すると天守閣は取り壊されて、天下の名城もわずか八百六十二円で落札されたという。有名な滝廉太郎の「荒城の月」は、荒廃した岡城で作曲されたが、土井晩翠の作詩は会津若松城の鶴ヶ城で着想されたと伝えられている。現在の天守閣は昭和四十二年に復元されたものである。

天守閣の復元により鶴ヶ城は面目を一新し、多くの松も充分に保護され、冬は見事な雪吊が見られるようになった。城のたどった悲惨な運命が、五層の堂々たる天守の勇姿をいっそ美しくしている。（以下略）

# 風土集



## 神蔵 器選

縛られて上海蟹の懐手 横浜

近藤幸三郎

年の夜の天地を返す砂時計  
凍蝶にあと一寸の朝日かな

船笛の銜となりし初山河

搔卷きに母居る如く日を入れし

粥噴きて春七草の色こぼす 市原

代田 青鳥

クロワッサン焼ける匂ひや寒明くる

雪吊のてつぺんに載る天守閣

葛湯飲む父の出世語りかな

薺打つ子のマンシヨンの十二階

風花や豆腐の角の美しき 東京

遊橋惠美子

円周率解くごと毛糸玉崩る

冬桜大観覧車より海二つ

左義長や火の海たひらとなりて果つ

倅せな家族構成蒲団干す

初夢の乗合バスは月へ発つ 東京

柴田 久子

ウエットスーツ軒に吊して寝正月

ガスの炎のより美しき大旦

シヤンパンは星の味なりクリスマス

大寒の浮雲にある裏おもて

石ひとつ遠くへ蹴つて大試験 調布

川井 政子

大寒の帯新しき広辞苑

遠きもの見るまなざしに冬桜

犀星の詠みしふるさと風花す

水仙の束に岬の怒濤音

青墨の片減りのして笹子鳴く 横浜

中村 洋子

縫ひ針を数へて仕舞ふ寒の入

舟よりも長き水棹や寒の入

初市に影をみじかく電車過ぐ

蕪村忌や母のルーペに辞書を読む